# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 183

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

# 目次

3641. 今朝方の夢

3642. 二種類の愛

3643. 絶え間ない模倣と実験

3644. 新年最初の月曜日の早朝

3645. 今朝方の夢

3646. 因数分解とコンマ数秒の世界

3647.「ティール組織」のブームの背後にある発達論的消費行動(その1)

3648.「ティール組織」のブームの背後にある発達論的消費行動(その2)

3649. 風の強い朝に

3650. 懐かしい思い出:狂気さと大根おろし

3651. 今朝方の夢

3652. 音楽理論に関するポッドキャストと反復の原理

3653. この地にやって来たこと

3654. 元上司と食事をする夢

3655. 本日の予定

3656. 地上のものは地上に:成人発達理論を取り巻く楽園思想

3657. 今日を振り返って

3658. 協働プロジェクトに参画しながら思うこと

3659. 今朝方の夢

3660. 地元が紹介される夢:家族愛を象徴する夢

© YOHEI KATO 2019

## 3641. 今朝方の夢

時刻は午前八時を迎えた。つい先ほど、一日分のコーヒーを入れ始めた。

フローニンゲンの寒さはこれからさらに厳しくなっていくだろうが、日の出に関してはこれまでよりも少し早くなっている。今日はあいにくの曇り空だが、それでも辺りが晴れてきている様子を見て取ることができる。

今日はまだ今朝方の夢について書き留めていなかったので、それを書いてから今日の活動を始めることにしたい。夢の中で私は、一台のワゴン車に乗っていた。車内を見ると、日本人の知り合いが二名、そして外国人の友人が一名いた。私たちは、これからどこかのレストランに向かっているようだった。

しばらくすると、目的地に到着し、車が止まった。見るとそこは山間のレストランであり、辺りは自然に囲まれてきた。私たちは車を降りて、レストランの入り口に向かった。見ると、そこはレストランというよりも、大衆食堂と述べた方がいいような店だった。

店内に入り、私たちは空いている席を探そうとしたところ、それをする必要がないぐらいに席が空いていた。この食堂の店内はとても広く、大きな大学にある食堂のような雰囲気を持っていた。フロアの真ん中辺りにある席に腰掛けようとしたところ、見ると隣接する左側のテーブルに、前職時代の女性の上司がいた。私はその方に挨拶をして、隣の席に座り、そこからは少しお互いの近況について話をしていた。

話を聞く中で、その方が最近作ったというプレゼン資料を見せていただくと、当時私が在籍していた頃よりも幾分サービス内容に変化があることがわかった。そもそも当該コンサルティング領域で扱うトピックがより拡張し、さらに専門的なものになっていることが窺えた。

上司の方としばらく話をした後に、三人の知人と共にご飯を食べ始めることにした。その時に、私はなぜだかわからないが、店に注文することなく、リュックサックから野菜や果物とパンを取り出して、それを知人たちに差し出した。持参していたのは、トマトとイチゴ、そして何枚かの穀物パンである。

他の知人たちは店に食べ物を注文し、それと合わせて、私が差し出した食べ物を少々食べていた。

食事がひと段落した時、私たちはこの食堂の奥にあるレコーディング室で、誰かに向けたメッセージを録音するためにここに来たのだということを思い出した。その場にいた全員がそれを忘れていたようであり、食事を終えようとしている時に、全員ハッとそのことに気づいた。そこから一人ひとりがレコーディング室でメッセージを残していったのだが、外国人の知人の一人は何かとても慎重にレコーディングを行っており、四、五時間ぐらいレコーディング室で録音をしていた。

ある時、あまりにも時間がかかっていると思ったので、レコーディング室を覗くと、レコーディングのプロの方から色々と助言を受けながら、真剣にレコーディングに臨む彼女の表情を見た。メッセージに対する彼女の想いのようなものを私は感じ、それが何時間かかろうが、彼女が納得のいく形でレコーディングを終えて欲しいと思いながら、食堂のテーブルに戻った。そこからしばらくして、レコーディング室から外国人の知人が出てきた。それをもって全員のレコーディングは無事に終了した。私たちは食堂を後にし、再びワゴン車に乗って帰宅し始めた。すると、このワゴン車はレンタカーのようであり、これから車を戻しに行く必要がある、と一人の日本人の友人が述べた。その前に、ガソリンを満タンにする必要があるのではないかと私は彼に尋ねた。

男性の友人:「それは自分がやるからいいよ」

私:「じゃあ、そのガソリン代はみんなで払うことにして、後で代金を教えてもらえる？」

男性の友人:「いいって。たった一本のペットボトル代ぐらい問題ないよ」

私:「ペットボトル？」

そのように私が尋ねると、後部座席に座っていた女性の友人が一言述べた。

女性の友人:「えっ、知らないの？これくらいのガソリンの消費量だったら、わざわざガソリンスタンドでガソリンを入れるんじゃなくて、2Lのスポーツ飲料を補給するのが常識よ」

彼女がそれを説明するまで、そのようなことが常識として行われていることを知らず、私はとても驚いた。ガソリンにスポーツ飲料を混ぜて希釈する考えはとても不思議なものに思えた。そこからもワゴン車に揺られ、窓の外の景色を眺めているところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/6(日)08:37

No.1546: A Deep Green Melody

I perceived a deep green melody just now. I composed it as a memorandum. Groningen, 21:33, Sunday, 1/6/2019

## 3642. 二種類の愛

時刻は午後三時に近づきつつある。午前中は天気が悪く、昼食前に買い物に出かけた際にも霧雨が降っていたのだが、今はそれも止み、幾分太陽の姿が見える。実際に先ほどは、太陽が書斎の中に照りつけていた。

こうした生活環境の中にいると、幾分視点取得能力が高まるようである。例えば、この土地の地面に咲く花々や雑草の気持ちがよく分かる。彼らが、太陽の方向に向かって手を差し伸べるかのように必死に生きている姿は心を打つ。太陽の方向に手を差し伸べる愛がそこにあり、太陽はそれに応えるかのように、地上に光を降り注げるという愛がそこにある。まさにそれらの関係は、エロス(上昇的な愛)とアガペー(下降的な愛)そのものではないかと気づく。二つの愛が、直接的な体験として今ありありと知覚されている。

私は毎日、絶えず何かをしているのだが、それが何につながっているのか、それがどこに向かっているのかが一切わかっていない。日々の探究活動と創造活動、そしてその他の仕事に関しても、それらが何につながり、どこに向かっていくものなのかが一切わからないのである。だが、もしかしたら私が日々行っていることは、この地上の花々が太陽の方向に手を向けるのと同じものであり、同時に自分が日々行っていることは、太陽が地上に手を差し出すのと同じものなのではないかと思えてくる。自分の日々の活動は、単に充実感と幸福感を持っているのみならず、そうした二種類の愛を抱擁しているものなのかもしれない。

先ほど、いつものように仮眠を取っていると、意識が完全にコーザル意識の状態になり、夢を見ない眠りの世界に落ちていた。私はもう十数年以上、朝の起床時に目覚まし時計を使うことを控えているのだが、毎日の仮眠の際にはタイマーを設置している。20分の仮眠が終わりに近づいた時、アラームとして鳴るバッハの曲がかかる数秒前にコーザル意識からサトル意識に戻り、不思議な感覚に包まれていた、というのが先ほどの体験である。早朝に目覚める時はいつも、新たな日及び新たな自己が始まったと感じるのだが、それと同じことを仮眠後に感じることがよくある。今日もまさにそうであった。何かが完全にもう一度まっさらな状態から始まる感覚がそこにあった。

今日は午前中に、ウィルバーの書籍の監訳の仕事を進めていた。注記のレビューは着実に進み、後二章分のレビューが残るだけとなった。今日はこれからラヴェルの曲を参考にして作曲実践を行い、その後にまた注記のレビューを進めていく。おそらく今日中に全てのレビューが完成するのではないかと思う。年末年始にかけてレビューを毎日少しずつ進めてきたことが、ようやく実を結ぶ。実際にそれが花となるのは、本書が無事に世に送り出された時になるだろうか。フローニンゲン：2019/1/6（日）15:02

No.1547: A Winter Festival

Although today's weather is not so fine, my feeling is festive to celebrate a new day. Groningen, 08:52, Monday, 1/7/2019

## 3643. 絶え間ない模倣と実験

今気がついたが、今日は日曜日のようである。その瞬間を迎えるまで、今日が日曜日であるということに気づかないでいた。頭のどこかではそれを知っていたのかもしれないが、一度もそれを意識することなく今日はこれまでの時間を過ごしていた。もはやこうなってくると、人間の体感時間なるものはいかようにも変容を遂げうるものだということがわかってくるし、いかに私たちが虚構の時間の中で生かされているのかということもわかってくる。

先ほどまで姿が見えていた太陽はどこかに消え、今は空一面が雲に覆われている。灰色の雲の下を一匹の黒い鳥が飛び去っていった。どことなく慰めの残り香が漂うような世界の中に身を置きながら、これから夕方の仕事に取り掛かりたいと思う。その前に、先ほどまで行っていた作曲実践につい

て振り返っておきたい。先ほどの作曲実践を通じて、改めて、いかに過去の偉大な作曲家が残した曲を模倣していくかについて考えさせられていた。

自分の曲をいかに生み出すかの前段階として、いかに過去の巨匠から汲み取れるものを汲み取るかが大事であり、それはすなわち、いかに模倣するかという問題に帰着する。単に模倣をしていては何も身につくことはなく、そこには模倣に対する自分なりの工夫が必要になる。そうした自分なりの工夫が積もり積もって、ようやく自分なりの作曲語法が確立されるのだと思う。過去の作曲家の楽譜を参照する際には、「自分ならこの局面においてはこのようにする」「自分ならこのようにしたほうがいいと思うのだが、実際にそのようにしてみたらどのように響くのだろうか」という発想を絶えず持ち、実験に次ぐ実験を行っていく。要諦は、模倣と実験にある。

一編の詩の中に一つの感動の粒子が存在しているように、どのような短い曲の中にも感動の粒子を体現させていきたい。それは小さくていい。ただし、一つの曲には一つの感動の粒子、ないしはその曲の生命を必ず吹き込んでいきたい。

詩を書くように曲を書く。手紙を書くように曲を書く。日記を書くように曲を書く。いついかなる状況においても、どのような場所においても曲を書いていく。そうした姿勢をこれからも持ち続けていく。

芸術哲学ならびに批判理論に関する関心が高まる一方で、それらとは領域を異にする形で、音楽理論に対する関心も高まっている。特に、楽曲分析を行うための音楽理論を学んでいきたいという思いが強くなっている。それは分析のための分析を行うためではなく、あくまでも作曲をするために行うものである。分析を通じて作曲に活用できる観点を獲得していくということ。そうした分析を通じた学習を怠っていては、いつまでたっても作曲の技術は高まらない。また、単に音楽理論に精通した形で曲を生み出すというよりも、そこに自分の全存在感が滲み出すような形で曲を生み出していきたい。そうなってくると、ますます自らの思想を育んでいくことが重要になってくることがわかる。哲学へ関心を示していることの理由は多岐にわたるが、そうしたことも一つの理由として挙げることができるだろう。フローニンゲン：2019/1/6（日）16:20

No.1548: Beckoning of Zero Degrees

I worked, kept journals, and composed music today, which was ordinary for me.

Tomorrow will be the same. Groningen, 17:02, Monday, 1/7/2019

## 3644. 新年最初の月曜日の早朝

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎたところで一日の活動を始めた。今日から新年を迎えての最初の月曜日となる。

昨日、年末から開始した監訳書のレビューを無事に終えた。本文のみならず、注記の翻訳に関するレビューを終えることができた。今回監訳中の書籍は、原書に関してはウィルバーの書籍の中でもかなり薄いものなのだが、日本語に翻訳してみると、かなりの分量になっている。今回監訳の仕事をして思ったが、今後もし機会があれば、再び監訳者としてウィルバーの未訳の書籍を翻訳出版することを行っていきたいという気持ちになった。それほどまでに、ウィルバーの書籍が現代社会にもたらす価値はまだ十分にあるという考えを持った。

以前の日記で言及したように、ここ数年間はウィルバーの思想から離れていたが、今回改めてウィルバーの思想に触れることによって、まだ随分と参考になる事柄があることに気づくことができた。それを含めて、今後も機会があれば、ウィルバーの書籍を日本に紹介できればと思う。とは言え、まずは今回の書籍をきちんと世に送り出すことが先決だろう。本文と注記に対するレビューは終わったので、レビューをした内容については一旦寝かせ、また改めて文章全体を確認しておきたい。

これから行う必要があるのは、監訳者として「はじめに」を執筆し、巻末の解説文を執筆することだ。今日と明日にそれらを行おうと思っていたが、他の仕事がいくつか入っていることに改めて気づいたので、文章の執筆は今週の木曜日から行いたいと思う。

数日前から、ここしばらくずっと聴いていたスクリャービンの曲からようやく離れ、昨日からはモーツァルトのピアノ曲を聴いている。昨日に、モーツァルトの変奏曲を聞いていると、ここ最近書き留めていた、成人発達理論やインテグラル理論の受容のされ方と活用のされ方に関しての自分の文章は、幾分変奏曲的だと思った。つまり、それらの主題は同じなのだが、それを伝えるための表現が異なり、角度を変えて主題の提示がなされていることに気づいたのである。本質部分に関してはどれも同じであるが、変奏曲において異なるモチーフを用いるような感覚で、様々な論点を取り上げながら同一主題について文章を書き留めていたようである。

今日も何かしらの文章を書くかもしれない。その際には、おそらく主題はこれまでと同じでありながらも、新たな論点や新たな観点が加わっているようなものになるだろう。

監訳書のレビューを終えた今日は、ここ最近毎日行っているように、過去の日記の編集を行っていく。毎日20本ほど過去の日記を編集していくという良いリズムが生まれている。そのリズムに今日も乗りながら、20本ほどの日記を編集していく。今日編集するのは、一昨年の12月に執筆した一連の日記になる。

そう考えてみると、およそ一年分の日記が未編集の状態であるが、焦ることなく、毎日20本の日記を編集していくことを継続していこうと思う。その他に本日行う必要があるのは、協働者の方たちとの明日の勉強会に向けた準備である。ここではスザンヌ・クック=グロイターの論文を取り上げており、明日は20ページほどの章を取り扱うことになっているため、その箇所を読み、ポイントをまとめておこうと思う。もう一つ本日に行っておきたいのは、成人発達理論をもとにした現在開発中のプログラムのレビューである。これは本日だけでは終わりそうにないので、今日と明日の二回に分けてコンテンツをレビューしていく。こうした仕事に並行する形で、今日も作曲実践に取り組んでいこうと思う。新年最初の月曜日も充実したものになるだろう。フローニンゲン：2019/1/7（月）06:44

No.1549: Convulsive Laughter of The Insane

I just recollected what my teacher said to me when I was a junior high school student: “You’re insane.” Groningen, 21:29, Monday, 1/7/2019

## 3645. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前七時に向かっている。一日の活動を本格的に始める前に、いつもながら今朝方の夢について振り返っておきたい。「いつもながら」という言葉に象徴されるように、どうやら夢日記をつけることは完全に一つの習慣になったようだ。毎日何かしらの夢を見ている日々が続き、しかもその内容を断片的であったとしても何かしら覚えているという状態が続く。それは昨年のどこかのタイミングで突如に始まったものだ。今もその状態が続いており、ある意味その状態を強固にするような形で夢日記をつけていたとすら思えるが、それが功を奏してか、毎朝夢から何かしらの気づきを得ることができている。さらには、そうした気づきのみならず、夢日記をつけることが一つの大きな

シャドーワークになっている。夢というのはシャドーの表れに他ならないことを考えると、夢日記をつけることは最良のシャドーワークだと言えるかもしれない。

夢の中で私は、陸上トラックに囲まれたサッカースタジアムの中にいた。観客席ではなく、ピッチ脇に私は立っていた。そこである試合を観戦していた。どうやらそれは日本のクラブチーム同士の試合のようだった。ピッチ脇で特にサイドバックの選手がどのような動きをしているのかを私は観察していた。

しばらくそうした観察をしていると、試合はまだまだこれからだというのに、私は前職時代のオフィスの中にいた。前職時代の会社の中で最も立場の上の人から呼び出しがかかり、その方の部屋に行ってみると、その方はスポーツ新聞を広げていた。ある日本人選手が代表選考に落選となったことをその方は嘆いていた。

その方:「ホンマに残念やわ〜。加藤君はこの選手をどう思う？」

私は呼び出しをくらったのは、てっきり仕事に関することだと思っていたのだが、どうやらサッカー談義をそこでするためのようだった。私はその方から受けた問いに対して、自分なりにその選手に対する考えを述べた。というのも、まさにその選手は、先ほどスタジアムの中で私が一番熱心に観察していた選手だったからだ。私はその選手のことを高く買っており、今回の落選は私にとっても残念だった。スポーツ新聞の文章を食い入るように読んでいるその方と私は、しばらくサッカーに関する話をしていた。そこで夢の場面が変わった。

どうやら次の夢の場面も、先ほどのスタジアムが舞台となっているようだった。夢が進んだと思ったら、再び前の夢の場面に戻るような奇妙なことが起こっていた。そこでは何か印象に残る光景を見ていたというよりも、夢の中の自分の目に何かゴミが入り、目を傷つけない形でそのゴミを取ろうとしていたのを覚えている。意図的に何度もあくびをすることで目から涙を出し、その涙によってゴミを目から外に出すことを行っていた。

そこで一度目を覚ましたところ、現実世界の私の左目にも何かゴミが入っているような感覚があった。そこで夢の中で行ったとのと同様に、あくびを何度かし、その後再び夢の世界に戻っていった。フローニンゲン:2019/1/7(月)07:02

No.1550: A Peaceful Wind

A strong wind blew in the early morning, but it stopped now. A peaceful wind is blowing at this moment. Groningen, 09:25, Tuesday, 1/8/2019

## 3646. 因数分解とコンマ数秒の世界

つい先ほど、一日分のコーヒーが出来上がった。書斎の中にはコーヒーの良い香りが漂っている。こうした香りから喚起されるものも曲として表現していきたいと思う。そこに向けた学習と実践を今日も行っていく。

今朝方の夢について先ほど書き留めていたが、夢にはまだ続きがあったことを覚えている。それについても書き留めておきたい。

夢の中で私は、実際に小学校の時に所属していたサッカーチームの練習場にいた。そこでは、同じ学年同士でミニゲームを行っていた。その試合の中では、私は普段とは異なる左サイドのポジションにいた。一列後ろの左サイドバックの友人と常に何かを話ながら試合を進めている自分がいた。

ある時、相手選手がゴール前のライン際で大きなミスをし、コーナーキックになった。私はおもむろにコーナーの隅に行き、自分がコーナーキックを蹴ろうと思った。しかし、左サイドバックの友人でも十分に良いボールを蹴れるだろうと思ったので、彼に任せることにした。彼にコーナーキックを任せることを伝えると、彼は嬉しそうだった。

とは言え、私は彼にゴール前にボールを上げるのではなく、ショートコーナーの形ですぐに自分にボールを渡してほしいと伝えた。というのも、相手チームの選手はゴール前だけに固まっており、さらには、ペナルティーエリアのボックスの左隅から右足で反対サイドのゴールネットに向かってシュートを入れるイメージがその時すでに鮮明にあったので、すぐに自分にボールを渡してほしいと考えていたからだ。

友人は忠実にそれを実行してくれ、理想のポジションで自分の足元にボールが来た。いざシュートを打とうとした時に、数学の問題が脳裏をよぎった。それは因数分解の問題であり、回答は「close−close」あるいは「close+open」という二つのものだった。一瞬私はそれは一体どのような問題なのだ

ろうかと気になったが、おそらく累乗の混じった因数分解だろうと察しがついた。だが、回答が「close-close」か、「close+open」のどちらかだという点が少し引っかかっていた。というのも、私の頭の中では、出題された問題は、「close^2-open^2」を因数分解するものなのではないかと考えていたからだ。その問題であれば、回答は「(close+open) (close-open)」となるはずであり、最初に頭の中に浮かんだ回答とは異なるものだった。

そのようなことを考え、ハッと我に帰ってみると、どうやら自分がイメージしていた通りのシュートがゴールに決まっているようだった。私は実際には、自分がシュートを蹴る場面も、ゴールが決まった瞬間も見ていない。そして最も興奮するであろう、シュートしてからボールがゴールに向かっていくまでのコンマ数秒の光景を見逃していたようだった。コンマ数秒でありながらも、時間が緩やかに流れるかのようなその瞬間に立ち会えなかったのは残念であったが、すでにゴールに入るイメージが鮮明なものであれば、脳内で他の何を考えていようが問題はないことを知った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/7(月)07:23

No.1551: A Curtain of Cold Rain

The rain becomes heavier, and I can see a curtain of cold rain. Considering the condition of the clouds in the sky, it will continue to rain for a while. Groningen, 16:42, Tuesday, 1/8/2019

## 3647.「ティール組織」のブームの背後にある発達論的消費行動(その1)

時刻は午後の二時を迎えた。つい先ほど仮眠を取り終え、これから午後の活動に入っていく。

今日は昼食時に、とんでもなく旨いものを口にした。それは、ある協働者の方が仕事上の書類一式に加えて同封してくれた「万能和風だし」である。この和風だしは、ティーバッグのようなものに入っており、それをお湯に浸すだけで出汁(だし)が取れる便利なものだ。毎朝ティーバッグでお茶を作っている感覚で、それをスープを飲むための器に入れ、お湯をかけてみたところ、極めて旨いスープが出来上がった。本来の使い方は、その出汁を使って味噌汁を作ったり、うどんを作ったりすることにあるようだが、私は出汁をスープ代わりに飲むことにした。その味が極めて懐かしく、極めて旨く感じた。和風だしというのはそもそも、いろいろな具材からこし出されるものであり、その旨味は様々な要素の複雑な組み合わせが生むものだと思う。日本にはこのように、多様な要素が複雑に絡み

合う中で具現化されるものを見出す力が本来あるのだと実感させられた。「妙味」というのは、このように様々な要素が複雑に絡み合い、その結果として生み出された一つの事物なのだと改めて思わされた。

昼食時に使った出汁を取るためのティーバッグはもう一度使えると思ったので捨てずに取っておき、今日の夜もそれをスープ代わりにして飲もうと思う。協働者の方から本当にいい贈り物をいただけたと改めて嬉しく思う。

今日は午前中に、他の協働者の方たちとの勉強会に向けて、課題論文を読んでいた。昼食前にその予習が無事に済んだ。その勉強会で取り上げているのは、発達心理学者のスザンヌ・クック=グロイターが執筆した "Nine Levels Of Increasing Embrace In Ego Development: A Full-Spectrum Theory Of Vertical Growth And Meaning Making (2013)"という論文である。これは査読付き論文ではないのだが、そうであったとしても、勉強会で取り上げる価値のあるものだと思って昨年の後半からそれを取り扱うことにした。

クック=グロイターの理論モデル、さらにはビル・トーバートの理論モデルでいうところの「達成者型の段階」、ケン・ウィルバーのモデルでいうところの「合理性段階」、さらにキーガンのモデルでいうところの「自己主導段階（発達段階4）」までの個人の思考・判断・行動は、社会的にプログラミングされているものなのだということについて改めて考えていた。

こうした段階においては、例えば成人発達理論やインテグラル理論を含め、それらを既存の自分の世界観ないしは物語の中で消費する行動を取る。「取ることが多い」という表現にしようと考えたが、十中八九、ほぼ間違いなく彼らは、それらの理論以外にも、マインドフルネス瞑想にせよ、システム思考にせよ、リフレクションにせよ、いかなる実践に関しても、それらを自らの既存の物語の中で消費しようとする。そして、ここで述べている自らの既存の物語というのはまさに、社会的にプログラミングされているものであり、それに無自覚であるということが彼らの大きな特徴である。ある知人の方の話によると、最近は「ティール組織」という言葉が聞かれることは滅法少なくなり、それもまた一時的なブームだったのだろう。そして、そうしたブームの背景にあったのは、世間を支配している上述の発達段階の人々が、単に「ティール組織」の枠組みを一時的に消費しようとした行動があったのだ

ろうと推察される。そして彼らは、その消費行動を終えたところで、今度はまた別の消費対象を探しているにちがいない。

その対象が成人発達理論やインテグラル理論になるのか、はたまた他の理論や実践になるのかは誰にもわからないが、彼らの消費行動には継続して注意を向けて行こうと思う。さらに言えば、彼らが相も変わらず、既存の物語の中で消費行動を続けることに対して建設的な批判を投げかけていくような態度を私たち自身が持っておく必要があると思う。そのためには、私たち自身が各種の社会的なプログラミングから脱却する必要がある。それでは、そうした各種の社会的なプログラミングから脱却していくためには何が必要かということを考えてみると、数ある方法の中でも、一つはそうしたプログラミングの存在と特質について言及している論文や書籍を読むことは非常に有益だろう。

もしそうした文献が具体的にどのようなものかわからないのであれば、それはまさに、私たちの目が社会的なプログラミングによって曇らさられていることを示しているように思う。そのようなことを仮眠後にぼんやりと考えていた。フローニンゲン：2019/1/7（月）14:40

## 3648.「ティール組織」のブームの背後にある発達論的消費行動（その2）

時刻はゆっくりと午後三時に向かっている。外は雨が降っており、書斎の窓から見える雨を眺めながらぼんやりと考え事をしていた。

今日はこれから作曲実践を行い、その後、協働プロジェクトに関する仕事を進めていく。作曲実践をする際には、いつもその瞬間の自分の状態から、直感的にどの作曲家のどのような曲に範を求めるのか決定している。

先ほど、机の上の書見台に、ラヴェルの楽譜を置いた。ラヴェルのいずれかの曲を参考にしながら作曲をしようと思う。その前に、先ほど考えていたことに関する続きを書いておこうと思う。先ほどは、「ティール組織」のブームの背後にある、人々の消費行動について言及をしていた。それは、現代社会に広くみられる発達段階から生まれる行動特性の一つだと述べていたように思う。結局彼らは、自己の存在を呪縛している物語に気づくことができていない。そして、その物語は社会的に構築されたものである。そうした物語の中で彼らは、あらゆる学習や実践を、既存の物語の中でいかに成功するかという発想のもとで行っていく。これは文字取り、「あらゆる」学習や実践である。

確かに私は日本の外にいるため、実際のところはどうなのかはわからないが、様々な知人の方から話を聞くと、巷では、瞑想実践、ランニング等を含めたエクササイズ、睡眠、なんとアート（芸術）に至っても、「できるビジネスパーソンのための～」「エグゼクティブのための～」のような名の下で書籍化され、それらの実践がことごとく、既存の物語の中で成功するための消費対象に成り果てているようである。

諸々の学習項目や実践を一つの消費対象と見なし、既存の物語の中での成功を奨励するような書籍の内容を見て、疑問を持たない読者もいかほどかと思う。例えば、「瞑想によって心を整え、整えられた心を持って今よりも効率的にもっと働き、もっと金銭を獲得することを推奨するようなメッセージが含まれているのではないだろうか？」「ランニングによって身体をみっちり鍛え、これまでの身体では過労死をしてしまいそうなところを、それに耐えうる身体を作り、金銭獲得に向けてもっと働けるようになることを促しているメッセージが含まれているのではないだろうか？」「週末にアート（絵画・音楽）を鑑賞し、創造性を養うことによって、もっとカネにつながるサービスやプロダクトを明日から生み出していけるようになりましょう、あるいは、アートによって涵養された創造性を持って、自らの年収を高めていけるようになりましょう、という類のメッセージがそこに含まれていないだろうか？」という疑問を投げかけられるかどうかが大事になると思うのだが、世間を見る限り、そうした疑問が芽生えることはおろか、上記の諸々の実践を、既存の物語の中の成功に結びつける形で一生懸命消費していく姿しか見えないというのが正直なところだ。

現在監訳中のウィルバーの書籍の中で、「所与の神話」（myth of the given）に関する話題が取り上げられていた。まさに、現代という時代をたくましく生きていくために必要なのは、既存の物語の中で成功するための能力ではなく、さらには、カネを稼ぐための能力でもないのではないだろうか。そうではなく、自らの日々の意思決定・行動のすべてが、実は社会的に構築された「所与の神話」に過ぎないことを見抜く力を養っていくことにあると思う。でなければ、例えば、瞑想によって穏やかな心を獲得した状態で過労死に向かうように懸命に働き、ランニングやエクササイズによって鍛えられた健全な身体を持って過労死に向かうように懸命に働き、芸術鑑賞によって養われた創造性を持った状態で過労死に向かうように懸命に働くという奇妙なことが起こってしまだろう。今、それを「だろう」という推量表現で書いたが、それはもう現実に起こっている。しかもどうしようも無いほど大規模に。

「所与の神話」を見抜くことが大切な点については、私の知人の何人かの方たちも認識してくださっているようであり、実際にそれをブログやSNSを通じて発信してくださっている方もいる。一方で、そうした方たちから、どうしたものかと嘆きの声が聞こえてくることがある。それは何かというと、結局彼らの主張は、社会の物語の中で生きる人々には聞く耳を持ってもらえないということだ――おそらく私がここで書いていることもそうだろうが。

現在監訳中の書籍の中でウィルバーが述べているように、自己は既存の発達段階に強く同一化する特性を持ち――まさにそれゆえに安定した精神生活を送れると言えるのだが――、自己はその段階の世界観をまるである特定の宗教を信奉するかのように、その世界観に懸命にしがみつこうとする。しかもそれは、自分の強い情動と愛着が反映される形でなされる。

実際のところは、このプロセスは、発達の階梯が続く限り無限に続くのだが、現代人が縛られているのは社会的に構築された世界観、それも金銭獲得に強く吸引された金融資本主義的な世界観であることが、上述のように、ありとあらゆる学習や実践を、直接的にせよ、間接的にせよ、さらなる金銭獲得に向けた形で行ってしまうような現代の状況を作り出しているのだと思う。

そうした状況の中で、いかほどの充実感と幸福感が見出されるのだろうか。カネで買える充実感や幸福感というのは、間違いなくある特定の発達段階から生まれるものであるため、それらが存在することは確かである。同時に、そして明らかに、カネでは買えない充実感や幸福感が、それ以降の発達段階から生まれるということに私たちは無知でありすぎはしないだろうか。

カネで買える充実感や幸福感は、ひどく限定的なものであることに気づくことが必要であると強く思うのは私だけだろうか。あるいは、充実感や幸福感というものが、現代においてはもはや、所与の神話のもとに消費対象に成り下がってしまっているのかもしれない。フローニンゲン：2019/1/7（月）15:16

## 3649. 風の強い朝に

今朝は六時に起床し、六時半を少し過ぎたところで一日の活動を始めた。昨夜から強い風が吹いており、今朝も時折強い風がフローニンゲンの街を通り抜けていく。今日は昨日に引き続き、あまり天気は良くないようだ。今はまだ雨は降っていないが、曇り時々雨のような一日になるだろう。

昨日も自分のライフワークに打ち込むような一日であった。実際に活動している最中は、もはや充実感を得るというよりも、没入感の方が強く、ふと対象から離れて見た時に、後から充実感のようなものが滲み出すから不思議だ。

充実感というのはもしかしたら、没入状態ではなく、没入から一旦離れ、対象と距離を置いた時に滲み出すものなのかもしれない。ということは、現代人のように、狂気的な形で諸々の活動に没入、いや埋没していては真の充実感など感じようがないのではないかということが見えてくる。対象に埋没をするのではなく、対象への没入から醒めの体験を経ることによって、真の充実感が滲み出してくるように思う。

ここ最近は、ケン・ウィルバーの書籍の監訳の仕事があることもあり、他の書籍を読むことはほとんどない。他の書籍を読む時間がないわけではなく、そうした時間があるのであれば、その代わりに日記の執筆や作曲実践を行うようにしている。読むこと以上に書くことと作ることを優先する理想的な流れの中にいる。ともすれば、自分は読むことを重視してしまいがちなため、今の状況はとても良いように思う。

とはいえ、翻訳のレビューが全て終わったため、今週末からまた読書も再開していこうと思う。ちょうど明日か明後日には、先日イギリスの書店に注文しておいた、12音技法に関する二冊の書籍が届くだろう。それらはともに、ケンブリッジ大学出版から出版されているため、内容としても大変充実しており、読みごたえがあるだろうと期待している。

昨日は、本日に行われる協働者の方たちとのオンライン勉強会に向けた準備をしていた。今日は、他の協働プロジェクトに関する仕事に従事していこうと思う。具体的には、三月末に完成させることをめどにしているプログラムのコンテンツのレビューをしていこうと思う。ちょうど昨日も少しばかりレビューを始めており、今日は本格的にコンテンツに対してコメントをしていく予定である。

午前中の仕事のはかどり具合によるが、本日中に全てのコンテンツに対してレビューを行っても良いだろうし、二回に分けて明日に残りのレビューをしても良いだろう。重要なことは、無理をしない形で、集中してレビューをすることにある。また、過去の日記の編集や、日記の執筆、そして作曲実践

に充てる時間を確保することが極めて重要であるため、それらとの兼ね合いを見て、本日どれだけレビューをしていくかを決めていく。

顔を上げると、早速小雨が降り始めたことに気づいた。時折轟音のように鳴る風と共に雨が地上に降り注いでいる。今日も風のように一日を駆け抜けていくことになるだろう。フローニンゲン：2019/1/8（火）07:02

No.1552: A Walk of A Cheerful Goblin

My interior world at this moment has an atmosphere where a cheerful goblin can show up.
Groningen, 20:59, Tuesday, 1/8/2019

## 3650. 懐かしい思い出：狂気さと大根おろし

昨夜の就寝前に、中学校時代にある先生から言われた一言についてふと思い出していた。それは、「お前はどこかおかしい（狂っている）」と言われたことである。何をきっかけにそれを思い出したのかというと、おそらくは、就寝前に作った曲が、どこか狂人的な要素を体現しているように思えたからだと思う。中学校時代に、先生から上記のようなことを言われたのだが、今振り返ってみると、それほどおかしなことをしていたわけではないように思えてくる。

それを言われたのは、コンピューターに関する授業の時に、生徒一人一人がホームページを作る課題が出されており、それに取り組んでいる時だった。見ると、他の生徒は皆、自己紹介として自分の名前や部活の種類、好きな食べ物や好きな歌手のような項目を列挙していた。しかし私は、それらの項目を列挙する代わりに、全国の高校入試の数学の問題の中で、とりわけ難問といわれるものをホームページに掲載することにした。その作業に熱を入れていたところ、教師から「お前はどこかおかしい（狂っている）」と言われたのを覚えている。それを言われても特にホームページを修正する気はなかったので、結局それはそのまま、全員のホームページが収められた一枚のCDの中に焼かれることになった。

そのようなことを思い出しながら寝室に向かった。寝室の上でも、また過去のことを色々と思い出していた。一つエピソードして思い出したのは、私が幼稚園に通っていた時のことである。あれはまだ

私が三鷹ではなく吉祥寺にいた時のことだったと思うので、年少（4歳）か年中（5歳）の頃の話だったと思う。このエピソードは今でもその当時の場面をありありと覚えており、母とも懐かしながら笑い話として話すことがある。幼稚園でお絵描きする時間があり、そこでお題として取り上げられたのは「大根」だった。幼稚園の先生が、「今から大根を書きましょう」と言って、大根をテーブルの上に置いた。年少や年中の発達段階を考えると、具体的な事物を頭の中で想像して言葉や絵に表現することはまだ難しいであろうから、やはりその場には見本として大根が置かれていたように思う。

先生の掛け声をもって、皆が一斉に大根を描き始めた。当時の私が何より驚いていたのは、皆の画用紙を見ると、何とそこには正直にも大根が描かれていたことであった。「大根を描いてください」と言われたのであるから、大根を描くというのはおかしなことではないのかもしれないが、私が一番奇妙に思っていたのは、どうして大根しか描かないのか、ということだった。

教室の中にいた私は、「大根を描けと言われれば、普通大根おろしも描くだろう」と考えていたのである。厳密には、おろされた大根ではなく、大根をおろす器具も一緒に描くのが当たり前だろう、というような考えをその時の私は持っていた。そうしたこともあり、素直に大根だけを描いている他の子供たちに対して驚いたのである。今もそうであるが、当時の私は絵が下手であり、絵が完成した後に先生に見せると、先生から「洋平君、これは何？」と問われ、「大根おろしだよ」と答えたのを覚えている。

その時、先生は他の生徒が決して描くことはなかった、平面の奇妙な線が表す大根おろし器を私が描いたことに対して、随分と褒めてくれたことを覚えている。そのようなことを思い出していると、昨夜は脳が活性化してしまい、少々眠りの世界に落ちるのが遅かったが、今朝の心身の状態はとても良い。フローニンゲン：2019/1/8（火）07:27

No.1553: A Promise of an Icy Spirit

The sky above Groningen this morning is very “round,” and it seems to have a mild taste. I’ll start today’s work, stroking lightly the smooth shape of the sky. Groningen, 08:49, Wednesday, 1/9/2019

## 3651. 今朝方の夢

相変わらず風が轟々（ごうごう）と音を立てている。書斎の窓ガラスには雨滴が刻一刻と付着していく。

そういえば、今日はまだ今朝方の夢について振り返っていなかった。一日の活動を本格的に始める前に、それらについて振り返っておきたい。

最初の夢については、記憶がとても薄れており、その夢を見た後に一度目を覚ましたのを覚えている。その夢の中では、確か母と言葉に関するやり取りをしており、母が述べたことが非常に洞察に溢れており、啓示的な閃きを得たというような内容だった。

一度目を覚ました時にはまだその内容を覚えていたので、それを枕元の裏紙に書き留めておこうかと思ったのだが、結局それをしなかった。以前、夢から一度覚め、再び夢の世界に戻ると、最初の夢は次の夢によって上書きされてしまうから、一度目覚めた時にその内容を書き留めておくようにする、と日記で言及していたように思うが、どうも半覚醒状態の私は意思が弱いようだ。

最初の夢についてはほとんど覚えていないのだが、次の夢については比較的よく覚えている。夢の中で私は、あるアニメを忠実に再現した劇に参加することになっていた。厳密なタイトルは忘れたが、「台風を貫いて進む少女」か何かだったと思う。そのアニメの宣伝広告を見ると、一人の少女が傘を反対側に広げ、風に吹き飛ばされそうになりながらも、なんとか地面で踏ん張っている姿が描かれていた。

どうやらこのアニメは、テレビコマーシャルもされているようであり、私はその内容を確認した。するとそこには、劇に参加する者たちが寄せた手書きの絵が、パラパラ漫画のように動くようなものになっていた。私も絵を送ったのだが、どうやらそのCMには使われていないようだった。CMに使われている絵はどれも素晴らしく、色使いや登場人物の描写などが見事であった。CMの後半には、龍を描いたものや、一見するとよく分からない二つの抽象的なシンボルが組み合わさったものもあった。

私は、CMの内容を確認した後に、劇に参加することになった。その劇に参加しているのは、どうやら皆私の知り合いばかりであり、特に小中学時代の友人が多くそこにいた。

いつ予行練習をしたのか定かではないが、すぐに劇が始まった。劇の中で、何かの人たちがピアノを演奏するシーンがあった。ただしのピアノは不思議な作りをしており、巨大であった。「不思議な作り」というのはどういうことかというと、劇の舞台の壁際に長細く巨大な家具のようなものが置かれており、その引き出し一つ一つがピアノの鍵盤になっているというものだった。劇中、私もそのうちの一つを演奏することになっており、自分の立ち位置の近くにある引き出しをいざ開けてみると、それはピアノの音色が鳴るものではなく、オルガンの音色が鳴るものだった。

おかしいなと思って、隣の引き出しを開けると、そちらはピアノの音色が奏でられた。ただし、今度はその鍵盤の作りが通常のものとは異なっており、どこにどの音があるのかわからなかった。偶然私の近くに音楽教師がいたので、「C（ド）」の音がどこにあるのか聞くと、「そんなこともわからないの！」と叱責されてしまった。一応どこにCの音があるかを教えてもらったところで、夢の場面が少し変わった。

劇が無事に終わった時、舞台がエレベーターのような乗り物に変わり、地上からものすごい勢いで地下に降りていった。行き先はG1にもかかわらず、何層にもわたる階を下りていくような形で、そのエレベーターはどんどんと下に向かっていった。目的のフロアに到着すると、そこはどうやら駐車場のようであった。駐車場に到着した時、そこは確かに暗かったのだが、壁に設置されている窓からは、ショッピングモールの姿が目に入った。

そこで夢から覚めた。今朝方の夢も大変印象に残っており、実際には、劇の場面についてはもう少し異なる描写があったように思う。またアニメの世界そのものの中に私が入っていく場面もあり、そこで綺麗な池の前に佇みながら、一人の見知らぬ男性と話をしていた場面があったのを覚えている。そこでは、誰かが後世に思いを託す形で、その池に何かを埋めたという話を聞いていた。夢の最後の場面におけるエレベーターは印象的であり、無数の階層をものすごい勢いで下りていった様子を思い出すと、どこか無数の無意識の階層が存在していることを示唆しているかのようだった。フローニンゲン：2019/1/8（火）08:06

No.1554: A View of the Purplish Red Sunset

I went to a DHL service place, which is close to my house, in order to receive “Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)” and “Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional

Theory in Post-War Europe (2008)." While having a walk, I saw a view of the purplish red sunset, which gave me inspiration. Groningen, 17:00, Wednesday, 1/9/2019

## 3652. 音楽理論に関するポッドキャストと反復の原理

時刻は午前10時を迎えた。早朝より吹いていた強風が一旦止み、安らかな風が吹いていたのだが、再び風が強くなった。空に浮かぶ雲の動きがとても早い。

ここ最近は、食事を食べている時や家事をしている時には、"Music Student 101"というポッドキャストを聞いている。これは、二人の若い大学教授が音楽理論について解説をしているものであり、二人の掛け合いが実に面白いため、肩肘張らずに音楽理論を学ぶことには最適だと思う。毎回一時間を越すエピソードが60個以上もあり、気がつけば最後のエピソードに辿り着いていた。ここでも、小さく積み重ねていくことの大切さを実感する。

すべてのエピソードを聞き終えたら、再び最初のエピソードから聞き直したいと思う。各回のエピソードには、必ず何かしらの発見があった。おそらく、すべてのエピソードを聞いた後に、再度初回のエピソードから聞き直していけば、再び新たな発見をいくつも得ることになるだろう。もちろん、書斎には音楽理論に関するテキストが何冊もあるが、文字を目で見て音楽理論を理解していくよりも、このポッドキャストを聞きながら耳で理解していくことを優先させたいと思う。

昨夜作曲実践をしている際に、一つ面白い発見があった。それは端的には、同一のモチーフを連続して二つ並べることによって生まれる特殊な効果だった。より具体的には、完全に同一のモチーフを連続して二つ並べると、二つ目のモチーフが奏でる全体としての音は、一つ目のモチーフがあることによって、それとは異なって聞こえる、ということに気づいたのである。

こうした効果はおそらく、同一のモチーフを反復することによって新たな文脈が生まれ、その文脈が二つ目のモチーフに固有の意味を与えることによって生まれたものだと思う。まさに反復が生み出す見事な作用である。そうしたことを考えていると、ベートーヴェンがかつて、「一回よりも二回はなお良しである。ただし三回目は気をつけろ」という言葉を述べていたことを思い出す。これはもちろん反復に関するベートーヴェンの考えであり、モチーフを例にとって考えれば、一つのモチーフを

一度使うよりもそれを繰り返して用いることは良い効果を生むことが多いが、ただし三回繰り返すときには注意が必要である、と言えるだろう。

昨夜の作曲実践では、まさに二回繰り返すことの効用を実感していたが、今後はいかにくどくならないように三回の繰り返しを活用するかについても実験をしてみようと思う。反復によって新たな差異が生まれるというのは、どこか発達の原理と似ているものがあることに気づく。

今日はこれから、協働プロジェクトに関する仕事を進めていく。具体的には、現在開発中のプログラムに関するレビューを行っていく。それが終わる頃には昼食どきとなるだろう。昼食後すぐに、別の協働者の方たちとのオンライン勉強会がある。昨日の段階で、それに向けての準備を完了しているが、勉強会の開始前に、本日取り上げる学習項目をざっと確認しておきたいと思う。フローニンゲン：2019/1/8（火）10:27

## 3653. この地にやって来たこと

時刻は午後の三時半を迎えた。今日は相変わらず風が強い。時折雨が降り、強風と相まってそれは地上に強く降り注いでいた。今は雨が止み、遠くの空の雲間に夕日の輝きが見える。数羽の鳥たちが、強風に煽られながらも懸命に空を飛んでいる様子が見える。彼らの様子を眺めていると、逆風と戯れているかのようだ。不思議なことに、少しばかり意識を自己から離脱させ、鳥の内側に入ってみると、鳥が空を飛んでいる時の感覚がわかるような気がしてくる。

今日のこれまでの時間はどのように進んで行ったのかを改めて確認してみると、普段と何の変哲も無いものであった。自らの人生として自らの人生を生きることだけがそこにある。

午前中、協働プロジェクトに関するレビューがはかどり、夕方にもう少し取り組めば予定通りの進捗状況となる。明日はまた、そのレビューの続きに従事したいと思う。今日の昼食後には、他の協働者の方たちとのオンライン勉強会を終えた。これからゆっくりと夕方の取り組みを始めていく。

ぼんやりと窓の外を眺めていると、突然の気づきとして、自分がオランダにやって来た意味の一端が見えたように思えた。この地にやって来た意味、そしてこの地で三年間を過ごした意味は、醒め

の体験を積むことにあったようだ。醒めを体験した対象については諸々があるが、一つは自ら科学研究をなすことに対する醒めの体験を挙げることができる。私はこれまでの科学研究で培った知識や技術を今後も何らかの形で活用していくことになるだろう。それは確かだ。

そうした知識や技術というのは、この世界に還元していく一つの貴重な財産であり、それを共有していくことは自らに課せられた責務であると思う。一方で、私はもう、伝統的な学術機関に所属しながら科学研究に従事していくことはもはやないのだと思う。そうしたことを行うことにはもはや関心はない。

醒めの体験というのはまさに、伝統的な学術機関でなされる科学研究に対して、そこで語られているものが何であり、それはいかような世界観や価値観に立脚するものなのか、そしてそこで語られていないものは一体何なのかに対して明確な気づきを得た体験だと言えるだろう。そして私にとっては、そこで語られないものこそが自分にとって大切なものであった。そうした気づきを得るために、私はオランダに来たのかもしれないということを先ほど考えていた。

そろそろ夕方の取り組みを始めていこう。これから作曲実践を行い、その後、上述のレビュー業務の続きに取り掛かる。今この瞬間の自分は、フィンランドの作曲家が残した曲を参考にしたい気持ちがあるので、彼らの作品のいずれか一つに範を求めて作曲実践をしようと思う。今日も一日が、そして人生全体が、目の前を吹く風のように、そしてその風に乗って空を舞う鳥のように過ぎていく。
フローニンゲン：2019/1/8（火）15:42

## 3654. 元上司と食事をする夢

今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を始めた。ここ最近はついつい就寝のギリギリまでパソコンを開いて仕事をしてしまうことがあり、そうした日の夜は意識が変に覚醒しており、あまり寝つきが良くないことがわかっていた。そうしたこともあり、昨日はなんとか九時過ぎにはパソコンを眺めながら仕事をすることをやめ、ゴッホの手紙を読んでいた。就寝前にパソコンから離れたおかげもあり、寝つきも良く、今朝は快眠を取れた。

今朝も起床直前に印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、見慣れない大きなレストランの中にいた。そこはビュッフェスタイルで食べ物を取ることができるようなレストランであった。そこで私は、前職時代の上司のある一人の女性（AY）と食事をすることになっていた。食事の前に、お互いの近況について話し合い、その後、私たちは軽く何かを食べることにした。

食事を終え、レストランのカウンターにトレイを返しに行こうとしたところ、途中である二冊の書籍が販売されていることに気づいた。どちらの書籍も日本人の著者が書いたものであり、私は以前、そのうちの一人の著者の書籍をよく読んでいたことがあった。なにやら、今はキャンペーンを実施しているとのことであり、今売り出されているのは特別な版の書籍のようだった。私は右隣にいた元上司に、「これらの二冊の書籍を読んだことがありますか？」と尋ねた。

すると元上司は、「まだないんだけど、左側の書籍は前々から読みたいと思っていたのよね」と述べた。その返答を受けて私は、「せっかくだからここでその書籍を購入するのはどうですか？」と提案し、自分でその書籍を購入して、それを元上司に差し上げた。すると、元上司の方はとても喜んでいた。その書籍を販売していたのは、若いアメリカ人女性であった。彼女は、「残念ながら今は他の言語のものがなく、英語のものしかないんです」と英語で述べた。

元上司も英語には堪能であったから、「なんの問題もありませんよ」と私は返答した。そこで私はもう一つ、その販売員の方に質問をしようとした。というのも、その書籍の中の話は、確か昔に上映された映画が元になっていたのではないかと思い、その映画がいつ制作されたものかが気になっていたからだ。私はそれについて質問してみると、その映画は2001年に制作されたのとことであった。私はそれを知って、自分が予想していた通りだと思った。

レストランを後にする前に、私たちはトイレに行こうとした。すると、レストランの入り口から、前職時代にお世話になっていた人たちが何名か入ってきて、そこで立ち話が始まった。立ち話だけでは終わりそうもないということがわかり、結局私たちはまたレストランの中へと入っていった。そこで夢の場面が変わった。今朝方はそのような夢を見ていた。実際にはこの夢の前に別の夢があったように思う。チェスか何かのボードゲームが街中の一角で行われており、誰かがそれを行っているのを後ろから眺めているような夢だったように記憶している。フローニンゲン：2019/1/9（水）07:27

© YOHEI KATO 2019

No.1555: A Path of Light

In the end of today, I have a feeling that I found a path of light for tomorrow. Groningen, 21:14, Wednesday, 1/9/2019

## 3655. 本日の予定

気がつけば、一月も九日ほど過ぎた。時間が着実に進行しているのを感じる。そうした時間の流れ以上に、自分の日々の取り組みは着実に進んで行く。探究活動も創造活動も、そして協働プロジェクトの諸々が、毎日どこか彼方の見えない場所に向かって着実に進んでいる様子を見て取ることができる。

今日も、北欧にほど近いオランダ北部の町で生活を営みながら、着実に自分のライフワークを前に進めていくことになるだろう。

昨日は強風が吹いている時間帯が長かったが、一転して、今日はとても穏やかである。午前七時半を迎えようとしている今この瞬間は、辺りが真っ暗で空の様子がわからないが、天気予報を確認する限りでは、今日は晴天になるらしい。

今日も昨日に引き続き、昼食後に一件ほどオンラインミーティングが入っている。そのミーティングを終え、仮眠を取ってから午後の仕事にある程度取り組んだら、散歩がてら近所の宅配所に行き、届けられた書籍を受け取りに行こうかと思ったが、今日は昼食前に近所のスーパーに立ち寄る必要があるため、その前に書籍を受け取りに行こうかと考えている。

書籍の受け取りは焦っていなため、明日でもいいのだが、明日は午後から小雨が降る可能性もあるため、天気の良い今日中に書籍を受け取っておくのが賢明だろう。本日受け取る予定の書籍は、十二音技法に関する二冊の書籍“Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”と“Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2008)”の二冊である。数日前に一度自宅に届けられたのだが、私が不在であったため、近くの宅配所に書籍が保管されている。今日は午前中の仕事をある程度行ったら、それらの書籍を受け取りに行くことを優先させたい。

今日は久しぶりに天気が良いようなので何よりである。ただし、明日からの一週間はまたしても天気が悪く、太陽の姿を拝むことが難しそうなので、今日の太陽の光はとても貴重である。

今日はその他にも、昨日と同様に、成人発達理論に基づいた現在開発中のプログラムのコンテンツをレビューしていく仕事にも従事する。ちょうど昨日に、最も分量の多いコンテンツに対してのレビューが終わり、残っているのはそれほど分量の多くないものであるから、午前中にはそのレビューが終わるだろうと期待している。午前中のレビューの仕事、昼食後のオンラインミーティング以外の時間は、過去の日記を編集したり、日記の執筆をすること、そして作曲実践に十分な時間を充てたいと思う。今日も充実した一日になるだろう。フローニンゲン:2019/1/9(水)07:45

No.1556: Welcome Back

Just minutes ago, I saw a beautiful glow in the morning sky. Even if people have a comfortable dream and then have a nightmare, I wish they can come back to a peaceful daily life. Groningen, 08:57, Thursday, 1/10/2019

## 3656. 地上のものは地上に:成人発達理論を取り巻く楽園思想

時刻は午前十時を迎えた。今日のフローニンゲンは穏やかな天気である。外の天候がいかなるものであったとしても、私が毎日この書斎の中で行うことは一切変わりがない。外側の世界の天候とは関係なく、自分がいかなる状況に置かれていたとしても、この生を生きるということだけがそこにある。その一部として自分のライフワークがある。確かに、自分の生はすでにライフワークと一体化しているが、生そのものはライフワークを包摂している。

先ほどトイレに向かったとき、「地上で得られたものは地上に還元する。それが人間として生きることの一つの責務なのではないか」という考えが降ってきた。これは前々から思っていたことではあるが、再度先ほどその考えが湧いてきた。

この地上で日々自分のライフワークに従事する中で得られた知識や経験は、可能な限り共有していくことが重要である。なぜなら、それらはあの世に持っていくことができず、また、私たちの生は本

質的にはそうした共有で成り立っているからである。そのようなことを考えてみると、地上で得られたものは地上に還元するというのは自然の摂理なのだろう。

今朝のフローニンゲンの空には、まろやかな青空が広がっている。空の滑らかさを撫でながら、午前中の仕事にこれから再び従事していこうと思う。

早朝に、昨日書き残しておいたメモを改めて読んだ。そのメモには下記のようなことが書かれていた。あの世について全く知らない人が、さらには、実際にあの世に行ったことがない人が、私たちをあの世にいざなうことについてどう思うだろうか？それは奇妙なことに思えないだろうか。

奇妙な点は、あの世にいざなおうとする人と、あの世にいざなわれていく人の双方にある。これは形を変えて、成人発達理論の扱われ方に見られる事柄である。高次元の段階がいかなる課題や葛藤を内に抱えているのかを知らぬままに、高次元の段階へ到達することを推奨するのは、どこかおかしいのではないだろうか。高次元の段階に到達することが、あたかも救済をもたらすかのように喧伝する人が多いのは嘆かわしい状況である。

あの世に行ったことがない人が、そしてあの世がいかような場所であり、そこでいかような事柄が体験されうるのかに無知な者が、「あの世は楽園ですからあの世を目指しましょう」と述べているに等しいことが、成人発達理論を取り巻く世界の中で起きている。

いかなる発達モデルでもいいのだが、例えば、ロバート・キーガンの発達モデルにおける相互発達段階における実存的苦悩は一体何であろうか？スザンヌ・クック=グロイターの発達モデルの構成的認識段階の言語認識上の葛藤は何であろうか？カート・フィッシャーのモデルにおける原理レベルの思考形態を獲得してしまったことが引き起こす苦悩は何であろうか？それらがいかなるものかに無自覚なままに、そうした段階に到達することを奨励するのはいかがなものだろうか。あまりにも無責任でありはしないだろうか。

高度な発達段階に固有の課題と限界、およびそれに伴う実存的苦悩がいかなるものかを理解しなければ、短絡的な楽園思想を抱いたまま成人発達理論と付き合い続けることになるだろう。そのようなことを昨日書き留めていた。現状の成人発達理論は、結局それが未だ夢の中でさらなる夢を見るために活用されてしまっていることに留まっている。フローニンゲン：2019/1/9（水）10:25

© YOHEI KATO 2019

No.1557: A Galactic Super-Express

Although it is still in the midst of winter, the time of sunset becomes later. I'll read a book about serialism. Groningen, 16:56, Thursday, 1/10/2019

## 3657. 今日を振り返って

時刻は午後の七時半を迎えた。たった今夕食を摂り終え、これから就寝までの活動に取り組んでいく。

今日も過去の日記の編集や日記の執筆、作曲実践、そして協働プロジェクトに関する仕事に取り組んでいた。幸いにも今日は一日中天気が良く、昼食前の買い物に出かけた際にはとても清々しい気分になった。また、三時過ぎには近所のDHLの配達所に行き、ケンブリッジ大学出版から直接送ってもらった二冊の書籍“Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”と“Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2008)”を受け取った。

久しぶりに河川敷のサイクリングロードを散歩していた時、昨年の今頃を思い出した。ちょうど昨年の今頃から、フローニンゲン大学での研究インターンが開始され、街の中心部のメインキャンパスではなく、郊外にあるキャンパスに歩いて通っていたことを懐かしく思い出した。

昨年の自分が何度も通った道を、今日改めて歩きながら、いろいろと感慨深い思いになった。道中、「道(タオ)」について思いを馳せないわけにはいかなった。これからの人生で従事する一つ一つの事柄は、それ自体が道であり、そして無数の実践の積み重ねが究極的な道に繋がっていくのだと思う。散歩からの帰り道、時刻は夕日を拝むのに最適な時間帯になっていた。

そこで見た、赤紫色の夕焼けの美しさを忘れることはできない。美しい夕日が空に現れた時、いつも私はできるだけ仕事の手を止めて、ただぼんやりと夕日を眺めるようにしている。夕日の出現時には夕日に意識を向け、以降はぼんやりと夕日を眺める。今日もふと、散歩の足を止めて、しばし河川敷の道にたたずみながら、暮れゆく夕日を眺めていた。

今日はこれから、一日を締め括る作曲実践をし、その後少しばかりゴッホの手紙を読んでから早めに就寝しようと思う。先ほど湯船に浸かっている時に、先日考えていた、現代社会の消費的行動と

その在り方の問題について、またしてもあれこれと考え事をしていた。先日は、各種実践や学習というものが消費対象に成り果てていることを指摘しており、その中には芸術も含まれていた。芸術にも確かに外在価値(例:機能的有用性(芸術が心身にもたらす作用など))があるのは確かだが、多くの場合、芸術のそうした価値ばかりに目が向きがちであり、その価値を社会での成功に繋げるような形で消費していくような行動や在り方が目につく。

私たちは、芸術というものが持つその他の価値、つまり、内在価値を忘れてはならないのではないかと思う。芸術が何かに役に立つかどうかを議論するのではなく、芸術がそれとして持っている価値を忘れてはならないように思う。そしてそうした内在的な価値を外在価値に還元してしまい、それを既存の物語における成功を獲得するために単に消費するようであってはならないように思う。先ほどはそのようなことをぼんやりと考えていたが、この点についてはこれからなお一層考えを深めていきたいと思う。そして、そうした消費的風潮に風穴を空けるような手段を模索していく。フローニンゲン:2019/1/9(水)19:54

## 3658. 協働プロジェクトに参画しながら思うこと

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える頃に一日の活動を始めた。昨日は、昼食前に近所のスーパーまで軽くジョギングし、午後にもDHLの配達所までジョギングをしたため、それが良い運動になったのか、夜はすぐに入眠できた。そのおかげもあり、今朝の心身の調子は極めて良好だ。

ここ最近いつも思っているのだが、今年の冬はどうやら暖冬のようだ。もちろん、それは今のところという話だが。過去数年間を思い出してみると、12月に入るころにはすでにマイナスの世界に突入することが多かったのだが、今回の冬はそうしたことがほとんどなく、1月を迎えた今も最高気温がマイナスになることはない。それどころか、5度から8度の間で推移しており、例年に比べてかなり温かい冬だと言える。

冬の厳しさがピークに達するのは、1月から2月にかけてだと思われるため、これから寒さが一挙に増すことは考えられる。暖冬だと思っていたところから、急に寒冬に変化することも十分にありうることを想定しておこう。天候とはダイナミックシステムであり、本質的には予測不可能なのだから。

年末から昨日にかけて、監訳中の書籍のレビューや、協働プロジェクト関連のレビューを行うことが続いていたが、それらは昨日一段落した。もちろん、一つの仕事が落ち着くと、また新しい仕事が入ってくるのだが、こうした仕事を通じて、少しずつ自分の人生が深まっていくのを実感している。監訳中の書籍に関しては、今週の頭に、「はじめに」と解説の文章を執筆しようと思っていたが、他の仕事との兼ね合いから、それがまだできていない。ちょうど明日は時間的にゆとりがあるので、明日の時間を使ってそれに取り掛かりたいと思う。

「プロジェクト学習」という言葉があるように、確かに、具体的なプロジェクトに参画することによって、自分の知識や技術がより育まれてくのを実感している。様々な協働者の方たちと共にプロジェクトに従事することによって、自らの知見が育まれていくのを実感しているが、プロジェクトに取り組む意義はそれだけではないように思う。

知識や経験、および自己が育まれていく以上に、そこにはより重要な何かがあるのではないかと考えている。それはこれまで形を変えて何度も日記の中で主題として立ち上がっていたように、社会に参画することによって得られる生の実感のようなものであり、また、この世界と自己との確かな繋がりのような感覚である。今後も無理のない範囲で、様々な協働プロジェクトに従事していこうと思う。そこには、自己涵養が存在しており、同時に生きていることの本質的な実感のようなもの、そして社会的な生き物である人間にとって必要な、社会との繋がりの感覚がある。

今日も午前中に、一件ほどオンラインミーティングがある。新たな協働プロジェクトを進めていくにあたって、今日は色々な意見交換がなされるだろう。オンラインミーティング以外の時間は、過去の日記を編集すること、作曲実践、そして昨日届いた書籍に目を通すことなどを行いたい。今日も緩やかに自己の役割を担っていく。フローニンゲン：2019/1/10（木）06:41

No.1558: A Cheerful Song on a Cold Night

I'm in a meditative state of consciousness at this moment. Composing music for me may be the same as practicing meditation. Groningen, 20:14, Thursday, 1/10/2019

## 3659. 今朝方の夢

今、一日分のコーヒーを入れ始めた。時刻はまだ午前六時半を少し回ったところである。

コーヒーを作っている間に、今朝方の夢について書き留めておきたい。夢の中で私は、小中高時代の女性友達(NI)と、どこかの待合室か何かの中で話をしていた。彼女は小さい頃からピアノを習っており、ここ最近また演奏を始めたようだった。また、ピアノだけではなく、何か新しい習い事を始めようかと思っているというような話を私にしてくれた。

ちょうどその待合室のような場所にはピアノがあったので、ここ最近練習している曲を弾いてもらうことにした。すると突然、私たちは物理的に瞬間移動をし、学校の理科室のような場所にいた。理科室の後ろの方の席に彼女が座っており、私は彼女に話しかけることをせず、前の方の席に座ることにした。前の方の席には私の友人が座っており、私は彼の背中を後ろからポンと叩いて、彼に挨拶をした。

どうやらこれから、この場所でどこかの大学教授の講演会があるらしい。私が席に着くと、程なくして一人の教授が部屋に入ってきた。壇上に上がったその人物を見ると、日本人の女性教授であり、年齢は40代ぐらいだった。その教授は、最初のうちは日本語の標準語を話していたのだが、自分の意見と異なるような研究結果や論文について言及するときには、なぜか関西弁となり、いろいろと批判的な見解を述べていた。

残念ながら、その教授が話題に取り上げている内容に関しては、自分の方が知識があるようであり、彼女の講演内容も、他者の研究に対する批判もことごとくつまらなかった。だが、一人で少しおかしく思っていたのは、「ことごとくつまらない内容を扱う関西弁は、幾分笑いを誘いうる」ということに気づけたことだった。

私は、その教授の講演を背景音にして、講演内容とは全く関係ないことをいろいろと考えていた。すると、聴衆の一人から質問が出た。その質問者の発言に私の意識が向かった。質問者はある一人の若い日本人女性だったが、彼女は英語でその教授に質問をした。すると、その教授も冒頭の数節を英語で返答しながらも、再び日本語に戻った。

質問者の質問は幾分面白かったのだが、やはりその教授の回答はつまらなかった。すると、今度は一人の男性が挙手をした。見るとそれは、私の友人だった。教授が私の友人に発言を促すと、友人は質問をするのではなく、すっと立ち上がり、無言のまま壇上の方に向かっていった。そして、教授の後ろを通り、窓の前に立った。

そこで彼は次から次へと窓を開けていった。教授が、「どうしたの？」と尋ねると、その友人は、「いや、室内にいる数匹のハチを逃がしてあげようと思って」と述べた。私は気付かなかったが、部屋にはハチが何匹かいたらしく、彼はハチを逃がしてあげるために挙手をしたようだ。すると私の後ろの席の友人が、「しまったな、さっき一匹のハエを殺してしまった。逃がしてあげればよかったな」とつぶやいた。地面を見ると、そこには一匹のハエが死んでいた。

挙手をした友人は、すべてのハチを逃がし終え、再び自分の席に戻ろうとした瞬間、先ほどまでは日本人の女性の教授が壇上にいたのだが、彼女は消えており、いつの間にか若い日本人の男性教授がそこにいた。その教授は、物理か何かのある問題について講演を行っていた。

教授が一つ私たちに質問を投げかけると、それに対して私の友人の一人が挙手をして、自分の考えを述べた。どうやら友人のアイデアは、教授にとっても面白いものだったらしく、さらに友人の意見を促すような問いを続けた。それに対して友人は再び彼の意見を述べたのだが、そのアイデアを採用すると、どうしても「11280000.2」という値を「11280000」として扱うことになってしまい、そのわずかな誤差が後々致命傷になるということをその教授は述べた。

私のアイデアは、対数関数を活用するというものだったのだが、実は対数関数を活用することもあまり有効ではないことを、教授は次に説明した。その説明を聞いた時、夢の場面が変わった。フローニンゲン：2019/1/10（木）07:07

No.1559: In a Wind of Memories

A sense of feeling a wind of memories arises. A light blue wind is blowing. Groningen, 10:41, Friday, 1/11/2019

## 3660. 地元が紹介される夢：家族愛を象徴する夢

つい今しがた、一日分のコーヒーが出来上がった。よくわからないのだが、今日はいつも以上に、生きていることの静かな喜びが自分の内側に充満している。

自己は物質的な肉体を持つのだが、よりエネルギー的な存在に移行しているのを最近よく実感する。今、どこか近くで、小鳥が「ピピピピピ」と比較的大きな鳴き声を上げた。それを聞いて少しハッとして、再び自分の意識が戻ってきた。

先ほどは、今朝方の夢について書き留めていたように思う。実は別の夢を見ていたことをまだ覚えている。

夢の中で私は、一人の登場人物としてそこにいたのではなく、夢を観察する者としてそこにいた。実際には、夢の中で何かテレビ番組が放送されており、その番組をテレビを通して見るのではなく、放送されている内容そのものをどこか引いた目線で見ていた。その番組が取り上げていたのは、山口県のどこかのホテルだった。そのホテルは、美味しいご当地料理が食べられることを売りにしており、また、ホテルの各種設備が非常に充実していることも売りのようだった。

ホテルのレストランの様子が映し出された時、とても明るい照明がフロアーを照らしていた。一人の女性レポーターが、実際に提供されている料理を次から次に紹介していった。それらはとても美味しそうに思えた。そのレポーターは、レストランのみならず、各種設備についても説明をした。そこで突然、そのレポーターは別の場所に瞬間移動し、今度は私の実家がある山口県光市のある料理屋が特集された。

その店は、実際に私も何度か足を運んだことのある店であり、店内の様子が映し出された時、とても懐かしく思った。レポーターの女性は、店内で食事をしているある家族に話しかけ、その家族の父親がこの店について語ろうとしたところで夢の場面が変わった。

今朝方はそのような夢を見ていた。特に、実家の近くの店が特集された時、とても懐かしい感覚が湧いていたのを覚えている。また、この夢の後にもまだ別の夢を見ており、そこでは、何年か先の自

分の家庭の風景が映し出されていた。私には長女がいるようであり、もう5、6歳ぐらいの年齢になっていた。そして、長男もいるようであり、長男はまだ1歳ぐらいの年齢であった。

私は長女と話をしながら、長男と遊んでいた。私は地べたにうつ伏せになり、自分の背中に長男を乗せていた。長男は、歩くよりもまだハイハイの方が好きなようであり、私の背中の上を楽しそうにハイハイしていた。長男が私の背中の上を歩くたびに、不思議な感覚が自分の中で湧き上がっており、そこには子供を愛する気持ちと、このように家族と一緒に時間を過ごせる幸福感のようなものがあった。

そのような感覚に浸っていると、夢の場面が少し変わり、私は引き続き長女と何か話をしており、長男は私の父の背中の上をハイハイしていた。そうした微笑ましい光景が印象に残っている。それが本日の最後の夢であり、夢から目覚める瞬間には、高速で動く列車の窓から流れゆく風景を眺めていたのを覚えている。フローニンゲン：2019/1/10（木）07:49

No.1560: The Further Side of Shooting Stars

I'm meditating upon the further side of shooting stars. The self exists there, who is imagining the opposite side of shooting stars. Groningen, 15:00, Friday, 1/11/2019